

直木三十五全集

11

直木三十五全集

11

江苏工业学院图书馆
藏书章

短篇小說

女心藏記

其本劍豪列傳

示人社

直木三十五全集第11巻

平成三年七月六日発行

編纂協力 直木三十五全集刊行会

発行者 宗 野 信 彦

発 行 所 東京都文京区水道一―九―一
株式会社 示 人 社

郵便番号 一一二

電話 東京三八二―二四一三

印刷 モリモト印刷株式会社

製本 イワサキ・ミツル

装幀 落丁・乱丁本はお取替致します

本文及び口絵写真は改造社版直木三十五全集
第11巻（昭和10年4月19日発行）を用いた。

第十一卷目次

日本劍豪列傳

山岡鐵舟の卷	四
千葉周作の卷	三
柳生父子の卷	三
宮本武藏の卷	三
伊藤一刀齋と小野忠明	六
吉岡武勇傳	八
上泉信綱の卷	八
名人越後の卷	一〇
大石進を廻りて	一二
名劍雜俎	一〇
伊庭八郎と齋藤彌九郎の卷	一五

齋藤彌九郎父子

女心双情記

女歌舞伎金太夫

沙汰地獄

禍風

生きんとて

討つな敵

行路難

討つか、討つ

生きんが爲の危さ

斯人斯旅

死で守る操

待つ者

この別れ

一四

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

中短篇小説

情を杖に	二二五
滑る口	二四一
人夫の義	二四四
女の義	二五三
女心決斷	二五九
非心理心	二六七
此武士氣質	二七四
まゝならず物語	二九一
近藤源太兵衛	三〇六
伊達祕録	三一九
ある敵討たれ	三四三
槍の權三重帷子	三五八
伊賀越の仇討	三六八

日本劍豪列傳

富と 小を 柳き 吉し 林し 辻じ 幕ま 浅あ 齋さい 伊い 山や
田だ 野の 生ふ 岡か 田だ 月げ 屋や 利り 藤とう 庭ば
勢せい 忠た 宗ね 憲けん 左さ 大だい 又また 勸かん 八はち
源げん 明あき 矩の 房ぼう 門もん 休こう 郎らう 助すけ 郎らう
舟しゅう

名め 伊い 岩は 宮み 太た 平ひ 堀ほ 桃も 千ち 榊さ 山や
人じん 藤とう 間ま 本もと 田た 山や 部べ 井の 葉は 原は
越あ 忠た 小を 武む 忠ちう 子し 安やす 春はる 周しゅう 鍵けん
後ご 一かず 熊くま 藏さ 兵へい 龍りゅう 衛ゑ 藏さう 作さく 吉きち
吉きち

伊い 上か 松まつ 宮み 都と 片か 男お 高た 千ち 高た
藤とう 泉ふみ 田だ 本もと 甲か 桐きり 谷だ 柳りゅう 葉は
一いつ 信の 織お 伊い 太た 空く 信の 又また 榮えい
刀たう 綱づな 部べ 伊い 兵へい 鈍どん 友とも 郎らう 次じ
齋さい

小を 柳き 神か 佐さ 長なが 平ひ 島し 齋さい 大お 山や
野の 生ふ 谷や 々々 沼ぬ 井ひ 田た 藤とう 石い 岡か
善ぜん 宗ね 傳でん 木き 四し 八はち 彌や 石い 静せい
鬼き 嚴し 心しん 小こ 郎らう 郎らう 郎らう 進しん 山さん

山岡鐵舟の巻

山岡靜山の槍

幕末で、槍をもたせては日本一。槍一本で、伊勢守となり、幕府の遊撃隊長として、一代の名人と稱された高橋伊勢守泥舟。その兄が、山岡靜山。僅かに二十七歳で、早死したが、その槍術の技にかけては、弟よりも天才的で、當時海内無双と稱されてゐた南里紀介と、勝負して、四時間に亘つて争ひ、遂に勝負がつかなくつたといふ人である。四時間の大試合、二人が、槍を引いた時に、二人の槍の頭は、まるで、さゝらのやうになつてゐて、一寸餘りも短かかつたといふから、凄（こ）いものである。

午前の二時に起き出て、道場へ入つて、重さ十五斤の槍をとつて、縦横に突きを試みる事、千回づつ、時には、三千回、五千回——時には、夕方より曉に及んで、三萬回

に達した事さへあるといふから、その精勵（せいりき）ぶりは、常人の及ぶ所ではない。

安政二年六月——槍を振つてゐたが、いつものやうに、汗が出ない上に、ひどく顔色が悪いので

「先生、御病氣では？」

と、聞くと

「いゝや」

と、云つたが、その夜、ぼつくりと死んでしまつた。明かに、無理をしすぎたのであつた。

「人に勝たうとするには、技より心——徳をまづ修める事ぢや。心が勝てば、敵は自然に屈してくる。眞の勝とは、技で勝つ事ではなく、心の徳で勝つのをいふ」

かうした教訓を、僅か二十七歳で死んだ靜山は、人に云つてゐたのだから、いかに人格が立派であつたかど、うかがへる。この山岡靜山が

「わしの技を繼ぐに足る門人は、小野鐵太郎だが、小野は大身だし、わしは、小身の上に貧乏だし、釣合はぬ縁ぢや

とおもうてをるが——」

と、云つてゐたと、小野鐵太郎が聞くと共に

「私でよろしければ、山岡の家を継ぎませう」

と、——この小野鐵太郎が、山岡をついで、山岡鐵太郎即ち鐵舟になつたのである。

小野鐵太郎は、小野朝右衛門の第五子で、家は六百石の大身。山岡は、貧乏旗本であつたが、見込んだ山岡靜山、見込まれた小野鐵太郎。六百石の家から、小身の山岡へ、師恩に感じて、養子に行つた鐵太郎。こゝに、二人の人格が、單に武技の優れてゐるから、といふ事の上に、光つてゐる。

鐵舟が後年の得意の技である、突きは、この時に修業した槍の呼吸から、出てきたものであらう。

山岡家へ入つて、二十歳の鐵舟は、既に「鬼鐵」と稱されて、恐れられてゐた。

幼年の鐵舟と貧乏話

小野鐵太郎、十五歳といふ子供の時に、「修身二十則」といふのを作つて、座右の銘とした。曰く

- 一、誠いふべからず
- 二、君の恩忘るべからず
- 三、父母の恩忘るべからず
- 四、師の恩忘るべからず
- 五、人の恩忘るべからず
- 六、神佛並に長者を粗末にすべからず
- 七、幼少を侮るべからず
- 八、己に心よからざる事を、他人に求むべからず
- 九、立腹は道にあらず
- 一〇、何事も不幸を喜ぶべからず
- 一一、力の及ぶ限りよき方につくすべし
- 一二、他を思はず、己のよき事のみすべからず

- 一三、食する度に、稼穡の艱難を思ひ、草木土石にても粗末にすべからず
 - 一四、殊更に着物をかざり、うはべをつくるふ者は心に濁りあると心得べし
 - 一五、禮儀を亂るべからず
 - 一六、いつ何人に接するも、客人に接するやう心得べし
 - 一七、己の知らざる事は、何人にも學ぶべし
 - 一八、名利の爲に、學問技藝すべからず
 - 一九、人には總て能不能あり、一がい人に人を捨て、或は笑ふべからず
 - 二〇、己の善行を誇り顔に人に知らしむべからず、總て我心に恥ぢざるにつとむべし
- と、いふやうなものである。十五歳の少年として、格別に深い文句もないが、これを守つた事は、當今の學生の比ではない。さればこそ山岡靜山が、見込んで、己の跡を繼がせたいと云つたのである。

後年になつても、山岡鐵舟の貧乏といへば有名なものであつた。それは、何の收入もなく、たゞ貧乏であつたのではなく、入るもの、ことごとくを人に散じて、己につけぬからであつた。

疊は赤くなつてすり切れてゐるし、床の間には「本來無一物」とかいた掛物一つかゝつてゐるきり——その外には何一つの裝飾品もなく、妻の英子は、せつせと、觀世より作つてゐるが、これが内職であつて、質屋へもつて行つて、賣るのである。それで、家の中には、ごろ／＼と食客がゐる。

後年功によつて、子爵となつたが、貧乏は同じで、御内帑から五千圓を下賜されても、全生庵と、鐵舟寺へ納めて自分は一金をもつてなかつた。

それでゐて、人の貧乏を見ると、すぐ助けたい性で、自分に金がないと、人から借りるが、山岡の人格に敬服してゐる人は、喜んで求めに應じた。

「先生、證文などいりませぬ」

「いや、さうはいかん」

鐵舟が、名代の名筆で、さら／＼と書き流した一證文

一金壹千圓也

右借用候處確實也、然る上は生涯の中に返済致す

べく候事

貸主は喜んで、もつてかへつて

「何うだい、この證文は」

と、自慢をして、人に見せると

「五百圓つけるから、わしに譲つてくれないか」

といふ人が出てきた。

「五百圓つけても、千兩つけても、嫌ぢや、鐵舟先生は賣

り物ぢやない」

と、とう／＼この人は、證文を、表装して、軸にしてし

まつた。鐵舟、この事を聞いて

「それは困る」

と、云つたが

「こんな證文、又と天下にありますかい。金なんぞ、倍、

三倍して下さつても、返しはいたしません」

と、とう／＼、一枚千圓の證文になつてしまつたが、鐵

舟の人格の力である。

明治十九年、死ぬ前に、筆をとつて、書いた教訓に

金を積みて子孫に遺すも、子孫必ずしも守らず

書を積みて子孫に遺すも、子孫必ずしも讀まず

陰徳を冥々の中につみて、子孫長久の計を爲すに如か

ず

と、禪に深かつたが、正に、禪僧の如き高潔無垢なる人

格を有し、生活をしてゐた武人である。

明治天皇の、御座所の側らにいつも立つてゐて、天皇の

玉體の、守護の刀となつてゐたのは、この山岡鐵舟の刀で

ある。もつて、その人格の程がわかるであらう。

名劍淺利又七郎

「鬼鐵」の技と、心とをもつてしても、何うしても、齒の

立たぬ名劍士が、一人ゐた。それは、一刀流の浅利又七郎義明である。

この人は、初代と二代とあるが、初代は、浅利又七郎義信、三代目中西忠太の門人で、一刀流切つての名手であつた。二代目が、四代中西忠太の二男を養子にした義明である。

文久三年、鐵舟は、初めて又七郎の劍技に接したが、想像もつかぬ妙劍である。二十八歳になつてゐた鐵舟は、心を靜めて、立合ふが、對手にならぬ。

又七郎の竹刀は、最早竹や、木ではなく、又七郎の腕のつゞきで、生きてゐる。そして、その尖には、魂が入つてゐるし、眼があるし、鐵舟の竹刀は、それに睨まれてゐるやうで、何う動かさうとしても、動かない。

初代、二代を通じて、この又七郎は、二人とも、突きが名人であつたが、鐵舟も突きが、十八番であるに拘らず、又七郎の前へ出ると、蛇に向つた虫けらである。竹刀も、手も、心も、すくんでしまつて、何うにもならない。

「突き」

と、又七郎が云つて、びたりと、竹刀を咽喉へ向けると、誰でも、もうそれだけで、咽喉が、あがらくなつてくる。右へ廻ると、右へくつついてくるし、後ろへよると、そのまゝくつついてくるし、一手も合はさないのに、咽喉でもつまつてくるやうな感じになつてきて、汗が出る、足がふらつく。

「參つた」

と——まるで、魔法にかゝつてゐるやうなものである。

鐵舟も、この劍には、何うしても、勝負がない。

(不思議だ)

と、驚嘆して、直ちに、門へ入つたが、その精妙さは、とても、一年や、二年では追つつくものではない。

(いかん)

鐵舟は、道場へ出て、たゞ一人、考へ込んでゐると、それを見た又七郎が、そうと、後ろへきて

「えいつ」

その刹那、鐵舟の體が開くと、又七郎の竹刀を、ぽんと
うけた。

「見事」

たゞではとても受けられぬ又七郎の竹刀を見事受けたの
で、又七郎は

「別に、指南しよう」

と、云つて、それから後は、鐵舟一人を、別扱ひにして、
稽古をしたが、何うしても、又七郎に勝てない。

氣合がちがふ、素晴らしい氣合であつて、人間の腹から
出るものとは思へぬやうに、高く、品があり、強いもので
ある。

（これは、業から生じたものでなく、心から出たものだ）

と、思ふと、鐵舟は、山岡靜山の言葉

「人に勝つのは業でない、人間の徳だ」

と、云つたのを、しみじみと感じた。そして、江戸近く
の名僧として有名であつた伊豆の龍澤寺、三島の西方の星
定和尚について、禪を學ばうとして、三十餘里の道を、し

ばく通つて、禪を學んだ。

それから、鎌倉建長寺の願翁に「本來無一物」といふ公
案をもらつて

「敵に、驚き、恐れるといふ心があるやうでは、至らぬも
甚しい。又七郎の劍が、心に止つてゐる間は、生も、死
も心に止まつてをらう。武士に生死が、未だ念頭にあるや
うでは、本當の武士とは云へん。こゝに、本來無一物とい
ふ言葉の味がある」

と、云はれて、鐵舟には、それはよくわかつてゐたが、
それでも、又七郎に向ふと勝てぬ。十年の間、こゝへ通つ
て、禪では立派な修行者になつたが、それでも、又七郎の
前へ出ると、身體も、心もすくんでしまふ。又七郎の妙技
は、禪以上のものであつた。

一悟三十七年間

夜眠ると、又七郎の顔が、ちらちらとする。眼を閉ちて

も、それが見える。

(いかん——いかん、もつと、修行をしなくては——)

獨園和尚、洪川和尚、京へ行つては、天龍寺の滴水和尚にもついた。

かうして、鐵舟が修業してゐる間に——妻の英子は、玉蜀黍や、稗の粥を食べてゐた。夫を修行させたい一心に、妻は米さへ、麥さへ食べないで、稗の粥——それは、馬や牛さへ喜ばない食物であらう。

夜も、晝も内職の手を休めずに、ひど、あかぎれだらけの手で——春になつて、近くの野原に、たんぼや、野ぜりが出るやうになると、英子は、そうと、それを摘みに歩いた。食べられさうな草や、草の芽、木の芽に、英子一人の手で、つまれてしまつた。

「山岡の近くにや、青い草一本無えのう」

と、近所の人々は、嗤つたが、英子は、それを食べながら

(夫が、又七郎先生に勝てますやう)

と——髪一つ結ばずに、野へ、原へ、草をさがしに行く貞節無比の英子。

だが、鐵舟には、悟れない。世事に、王事に奔走しながら、日夜、又七郎の事を忘れないが、何うしても、及ばない。

(一生の間に——たとへ、百年かゝつても——)

滴水和尚は、鐵舟に

「兩双鉢を交ふ、避くるを須ひず」

といふ公案を示した。鐵舟が、劍を學んでから、三十七年目。明治十三年三月十三日——鐵舟四十五歳、又七郎へ入門してから、二十三年目の、曉の五時頃——鐵舟の全身に、しびれ渡るやうな明るさが、閃々と共に——今まで、眼の中に——二十三年間、眠ても、起きても去らなかつた又七郎の顔が、その瞬間に消えてしまつて、空になつた心には、恐ろしさもなく、驚きもなく、たゞ安らかさのみが、春風のやうに、蕩々としてゐた。

鐵舟は、立上つて、竹刀をとつて、正面につけたが、い

つもさうすると、ちら／＼としてくる浅利又七郎が、少しも現れて来ない、そして、鐵舟の心には、何の動搖も、何の不安もなく、勝たうとする心もなく、負けるとおもふ心もなく、生なく、死なく、己さへなくなつてしまつてゐた。

鐵舟は、直ぐに、浅利又七郎を訪ねた。そして

「一手合せ、御願ひ致したく」

と、いふと、ちつと、鐵舟を見つめてゐた又七郎が

「ようし」

二人は道場へ出た。鐵舟が、竹刀をとつて、ちつと構へ

たのを見ると

「うむ」

又七郎はうなづくと

「それまで」

「はい」

「よくも、それまで工夫なされた。それこそ、流祖が極意の夢想劍ぢや。二十餘年の修業——山岡、よくも、工夫をしてくれたのう。これで、わしは死ねる。心に残すものは

ない。忝けない、山岡」

又七郎の眼には、涙が光つてゐた。

一死君恩に

鳥羽、伏見の一戦に打負けて、江戸へ戻つてきた徳川慶喜は、上野大慈院へ入つて、謹慎してしまつたが

「官軍は、どこまでも、將軍を、やつつけるつもりであらう」

と、いふ噂が立つた。そして、官軍は、どん／＼押しよせて、名古屋を出立したといふし、東北の諸藩は、ごたごたするのみであるし、西國の大名は、こと／＼と、官軍へついてしまつたし、何う考へても、徳川は滅亡の外にないと、見られた。

（命をすてる時がきた）

と、鐵舟は感じた。

（幕府の中に、これと云ふ人物のをらぬ以上、わしのやう